

## 論壇

## 岩手公衆衛生学会誌の発刊に寄せる

岩手公衆衛生学会  
会長 角田文男

多年の念願であった岩手公衆衛生学会誌の発刊が叶って慶びに堪えず、創刊号を発刊するに当り本誌への希望と発足間もない岩手公衆衛生学会への期待とを巻頭に寄らせて頂きたい。

私が岩手の公衆衛生に直接接したのは、県内の大学で公衆衛生学を専門とする唯一つの研究室であった岩手医科大学医学部衛生学公衆衛生学講座を担当すべく赴任した昭和47年4月からである。思えば着任以来今日まで、県内唯一の研究室とは学内外から何を期待され、また学内外へ何を為すべきか——いわゆる大学の研究室の在り方を巡って模索し乍ら活動してきた17年間であった。そして、機関誌を持てるほどの実力のある岩手の公衆衛生学会を創設することをずっと希ってきた。

着任当時、既に県内には岩手小児保健協会学会と岩手県母性衛生学会という二つの公衆衛生関連学会があった。それぞれ岩手医科大学の小児科と産婦人科の教室を中心とした実地臨床医と保健婦・助産婦等からなる母子の医療保健研究会である。この頃までの岩手県の公衆衛生は、乳児死亡の半減、さらにゼロを目指す母子保健問題が最重要課題であったからであろう。また、公衆衛生関連の定期刊行誌についても、既に著名な「岩手の保健」があった。岩手県国保連の発刊する同誌は、地元の公衆衛生問題と実践活動事例の数々を平易に解説・紹介する優れた地域保健の啓蒙誌として県内に広く定着していた。

こうした岩手県の公衆衛生事情も、昭和年代の後期には大きく変貌した。かつての母子保健問題から成人病、さらに老人保健問題へ、不良居住環境から産業化に係わる公害や産業保健問題へ、栄養不足から栄養過多問題へと、岩手県の公衆衛生は多彩な課題に対処せねばならぬ時代を迎えた。そのためには、専門分野化の進む各領域の公衆衛

生関係者が一堂に会して業績を発表し切磋琢磨する研究会を設け、常に総合された公衆衛生学の新しい知識と技術を各自の研究や職務に生かす必要が不可欠となった。

年号が昭和から平成に改元された機会に、岩手の公衆衛生学会の創設が提唱された。学会は会員の自主運営によるものの方針に基づき、学会名は県の字を削った岩手公衆衛生学会と称し、会員の本学会への熱意と支持の昂揚を期待したいとされた。

平成元年度内に創立すべく、昨年末慌しく入会案内を発送したところ、わずか二週間の申込期限であったにも拘らず、二百余名の創立総会出席と四百数十名の入会申込が寄せられてきた。ひとつには立身政信助教授をはじめ学会設立準備世話人各位の奔走があつての盛会ではあるが、これほどまでに多くの方々から本学会の創立が待たれていたのかと、大いなる感動を覚えた。

その上、創立総会では学会事業のひとつに機関誌「岩手公衆衛生学会誌」の定期刊行が決議された。本学会が研究発表会や研修会の開催だけでは公衆衛生学の普及に不十分であり、岩手で得られた公衆衛生学の成果を掲載する学術誌を刊行して会員の学識向上に貢献し、更に県外の公衆衛生関係者にも岩手の公衆衛生学を知らせたいものである。本誌には岩手の生活に根差す公衆衛生問題を、その地方に適った独特の技法で解明した論文や報告が満載されるような機関誌へと発展されることを切望したい。

恰かも、日本公衆衛生学会の節目に当る第50回総会（平成三年）の盛岡開催が承認された時である。全国の公衆衛生関係者に本学会の確かな存在を知らせる絶好のチャンスとなろう。また、そのように本学会が発展することを心から期待している。